

俳句への道 夫・富岡隆夫との思い出

富岡訓子

四十代の初めころでしょうか、土生重次さん、夫・隆夫、私との三人が銀座通りを歩いていた時、土生さんがポツリと「俺、俳句『歳時記』に載った」と言われ、隆夫が振り返り「凄いね！」と申し、俳句に疎い私は黙っていたように思います。土生さんと隆夫は、互いに親しすぎて、「誘わず」、「応じず」の関係のままで親交が続いていました。



その代わりではありませんが、山家由紀さんと私が、当時、土生さんが入会されていた「蘭」俳句会（野澤節子主宰）にともに勧誘され、そのご縁で後に土生さんが主宰された「扉」俳句会へと引き続いてご指導に与りました。とはいえ、五十代の専業主婦にとっては、必ずしも熱心なお弟子とは言えるほどでもなく休みがちでもありました。

あめんぼう己が十字の影に乗る 重次 私が大好きな土生さんの遺作です。

そのような頃、小川誠二郎さんが「扉」俳句会に入会されました。「松本楼」での「扉」俳句会のパーティーの時、なんでも「十万人に一人の難病」を患っておられた由お聞きしましたが、小川さんは気持ちを強く持たれ、土生さん亡き後も熱心に「扉」俳句会のお世話をされました。

小川さんのお声がかかりで中野陽典さんに「扉」俳句会へお誘いし、その後いろいろな機会に中野さんから土生重次さんの俳句が紹介され、俳句にかける思いが解説されました。

この様に俳句を通して親交を重ねた土生さん、小川さんおよび夫・隆夫は今は亡く、夫・隆夫の日記によりますと「昭和三十四年三月末、初任地・新潟へ発つ日を前にして、百年以上経た富岡の家に土生さんが山口富蔵さんとともに泊りに来てくれた」と書いてあり、二十二歳の「別れ」と「出発」に際してどんな会話を交わしたのだろうかと思ったりしております。

その会話の中に、三丘七期会同窓の皆さんが、小川さんと中野陽典さんによって起こされた「金剛俳句会」に相和して集い、その発展として「アカシア俳句会」へ繋がる姿を構想したかどうかと思うと、この投稿が夢のようでもあります。



土生さんが参加された珍しい写真

東京三丘七期会

後列左より(敬称略)

富岡隆夫、○、土生重次、○、○、

岡田 弘、小川誠二郎

前列左より(敬首略)

上田健司、富岡訓子、以倉先生、山家由紀、松村阿以子